

逃亡者達のランドリー

田端 祐樹

【人物一覧表】

吾妻（30）：結婚式から逃げた社会人
三波（18）：受験に失敗した女子高生

○ 住宅街・夜

雨の中の住宅街。

吾妻（30）、傘をささずにタキシード

姿で息を荒くして走る。

暗い街の中、向かっている方向にひと
きわ光るコインランドリーを見つける。

吾妻「コインランドリー⋮⋮」

吾妻、コインランドリーの中に逃げる
ように入る。

○ コインランドリー・夜

古びたコインランドリー。

洗濯機が一つだけ回っている。

三波（18）、机で勉強をしている。

吾妻、ずぶ濡れのままコインランドリー
に入る。

吾妻「くそ、ずぶ濡れだ。ああ、これレンタ

ルだつた⋮⋮どうしよう。」

三波、吾妻を不審者を見るような目で

見る。

吾妻 「すみません。」

吾妻、三波に気付き、
吾妻、ジヤケットを脱ぎ、乾燥機を眺
める。

吾妻 「いけるかな。」

と、ジヤケットを乾燥機に入れようと
する。

三波 「縮むよ。」

吾妻 「え？」

三波 「スーツ縮むよ。」

吾妻 「あ……ダメなの？」

三波 「うん。」

吾妻 「そっか……危ない。ありがとう。ごめ

んね、勉強中に。」

三波 「いや……」

と、勉強に戻る。

吾妻、暖房の前に椅子を置き、ジヤケ

ットを掛け、乾かそうとする。

三波、ペンを置き、

三波 「それもだめ。」

吾妻 「え？」

三波 「生地痛むよ。」

吾妻 「そうなの？」

三波 「何も知らないじやん。」

吾妻 「こういうの普段着ないから……」

三波 「ふーん……」

三波 、勉強に戻る。

吾妻 、三波の向かいに座り、ジャケットを横の椅子に掛ける。

三波 「え、座るの？」

吾妻 「あ……だめ？」

三波 「いや、別にいいけど……」

数秒の沈黙。

吾妻 、時計を確認し、重たい空気から逃げ出すように自販機へと向かい、コ

ーランポタージュを2つ買う。

吾妻 、コーンポタージュを机に置き、

吾妻 「これ……結構です。」

三波

吾妻 「ほら、勉強頑張っているみたいだし。
ね。もらつてよ。」

三波 「ああ、はい。」

吾妻、コーンポタージュをチビチビと
飲む。

三波 「なんでタキシードなの？」

吾妻 「え？」

三波 「服。」

吾妻 「ああ、色々あつて……」

三波 「……まさか結婚式から逃げ出したとか
……そんなわけないか。」

吾妻、三波から視線を逸らす。

三波 「え、当たり？」

吾妻 「うん……」

三波 「え、え？ どういうこと？」

吾妻 「そのまんまだよ。」

三波 「できるの？ 結婚式から逃げるつて。」

吾妻 「まあ。僕が実際にできているわけだし。」

三波 「なんで？ なんで逃げたの？」

吾妻 「いや、いいよ僕の話は……」

吾妻 「ほら、勉強頑張っているみたいだし。
ね。もらつてよ。」

三波「今、これ以外の話をする選択肢ないよ。」

吾妻「あるよ。別に。ほら、雨すごい降つて
るね。午前中はあんなに晴れていたのに。」

三波「結婚式から逃げた人がいるなら雨も降
るよ。」

吾妻「あ、僕のせいなんだこの雨。」

三波「婚約者の涙だよ。」

吾妻「なんか途端に寒く感じてきた。」

三波「で、どのタイミングで逃げてきたの？」

吾妻「……タイミングは……披露宴のお色直

しの時だね。」

三波「え、じやあ挙式はしたってこと？」

吾妻「……うん、したよ。」

三波「神父に誓つたの？」

吾妻「うん。」

三波「健やかななるときも？」

吾妻「うん。」

三波「病めるときも？」

吾妻「うん。」

三波「一生愛し続けることを？」

吾妻「誓った！誓った！そうです。誓いました！誓つたうえでその日に逃げました！その日っていうか数時間後に！もうやめてよ！」

三波「（ニヤニヤと）クリーリングオフまだ使えるかな？」

吾妻「結婚にそんな便利な機能はない！」

三波「え、でもさ、結婚式挙げるっていうことはもう婚約はしてるの？」

吾妻「してない。結婚式のあとに籍をいれようつて話になつてて。」

三波「あ、じやあこの後、びしょ濡れのおタキシードのまま、籍をいれに行くんだ。」

吾妻「だから！：：：もう：：：」

と、頭を抱える。

三波「ごめんごめん。でもさ、なんで逃げた

の？好きじやなかつたの？」

吾妻「彼女のことは好き：：：だと思う。けど

：：怖くなつたんだ。」

三波「何が？」

三波「誓つた！誓つた！そうです。誓いました！誓つたうえでその日に逃げました！その日っていうか数時間後に！もうやめてよ！」

吾妻 「責任かな……」

三波 「（真剣な眼差しで）責任？」

吾妻 「結婚して彼女と家族になつて、そのうち子どもを授かって、育てて。全部自分だけの問題じゃなくなるわけじやん。情けない話、その重大さに結婚式の途中で気づいたやつて……気づいた時には逃げてた。」

三波 「気づいたら……」

吾妻 「衝動だよ。衝動だけでここまで来ちゃつた。」

三波 「……」

吾妻 「はい。僕の話はこれでおしまい。君は？なんでこんなところで勉強してるの？」

三波 「どこで勉強しても別にいいでしょ。」

吾妻 「わざわざコインランドリーでやる必要はないでしょ。」

三波 「洗濯回してくるから。」

と、回っている洗濯機を指差す。

吾妻 「あ、あれ君のか。」

三波 「そう。」

三波 「… 私も逃げるの。」

吾妻 「… 逃げる。何から？」

三波 「おじさんと一緒に。現実から。」

吾妻、三波のコーンポタージュをよく振り、開けた状態で手渡す。

吾妻 「暖かいうちに。」

三波 「ありがとう。」

と、コーンポタージュを飲む。

三波 「落ちたの。大学受験。」

吾妻 「…」

三波 「滑り止めは受かったから、来月から大学生にはなれるんだけど、第一志望落ちちゃって。悔しいじやん。考えたくないし。お金のこともあるし。だから、ほら。」

と、開いている教科書の表紙を見せる。

教科書の表紙には「倫理」と書かれて

いる。

吾妻 「倫理？」

三波 「そう。私、理系だからまったく必要な

数秒の沈黙。

いんだけどやつてるの。頭に考える隙間をなくすために。」

吾妻「…」

三波「似てるかもね。」

吾妻「似てる？」

三波「だつてお互に逃げてるじゃん。現実から。まあ、おじさんの方がまだいいか。」

吾妻「なにもよくないよ。君と違つていろんな人に迷惑をかけている。現在進行形で。」

三波「でも、逃げた結果、現実は変わつたでしょ？私は何も変わらない。生産性のない

勉強を続けていく。」

吾妻「勉強に生産性のないものなんてないんじやない？」

三波「あるでしょ。こんなの将来なんの役にも立たない。」

吾妻「いつ役に立つかなんてわからないよ。ほら、サイン、コサイン、タンジェントつてあるでしょ？あれ、仕事で僕、使つているからね。」

三波 「あれ、使う仕事あるんだ。」

吾妻 「そうだよ。僕も学生時代使うことないだろって思つてたけど、今使つているから。この倫理の勉強がいつか役に立つかもよ？」

三波 「そうかな……」

吾妻 「そうだよ。まあ高卒が何言つてるんだつて話だけど。」

吾妻、コーンポタージュを飲み干す。

三波 「ていうか、おじさん。連絡とか来てないの？ 逃げてきたんだから何かしら来るでしょ？」

吾妻 「あー……そうだよね。そろそろ……」

と、スマホの電源を入れる。

三波 「(ニヤリ) 電源切つてたんだ。」

吾妻 「怖くてね。現実から逃げるならとこどん逃げてやろうつて。」

吾妻、電源を入れてすぐに電話が鳴りだす。

吾妻 「あー……」

吾妻と三波、目を合わせる。

三波 「誰から？」

吾妻 「誓った人。」

三波 「神父？」

吾妻 「あ、そっちじゃなくて、奥さんになる予定だった人。」

三波 「そっちか。」

吾妻 「……出たくないな。」

三波 「出なよ。」

吾妻 「出なきやダメかな？」

三波 「ダメでしょ。まだ逃げるの？」

吾妻 「……覚悟決めなきやね。」

と、緊張で息を止め、ゆっくりと受電ボタンを押そうとするが、怖気づき、

吾妻 「（息を吸い）ダメだ！無理！」

三波 「頑張りなつて！」

吾妻 「だつて、戻つて地獄以外の選択肢ないじやん！」

三波 「そうだけど、このままずっとここにいるつもり？ここにいても何も起きないよ？」

吾妻 「うーん……」

三波 「おじさん、たぶんいい人だから。何とかなるよ。多分。」

吾妻 「多分？」

三波 「多分。」

吾妻 「多分。そうね。多分。行こう！多分丈夫。丈夫！」

と、立ち上がり、コインランドリーの外で電話を始める。

三波、外にいる吾妻の背中を見つめる。吾妻、声は聞こえないが、話しながら頭を何度も下げている。

三波 「（笑って）めっちゃ謝ってる。」

三波、倫理の教科書をそっと閉じ、表紙を見つめる。

吾妻、肩を落とし、コインランドリー内に戻る。

三波 「怒られた？」

吾妻 「怒るの通り越して呆れられてた。」

三波 「もう第2フェーズ入ってるじやん。」

吾妻 「今すぐに戻つてこい。話があると。」

三波 「そりや話はあるだろうね。一旦、区切

りをつけるためにもいかないとだね。」

吾妻 「地獄は確定だから。なるべく穏やかそ

うな地獄の道を選ぶよ。」

三波 「そうだね。」

「ピーピー」と洗濯が終わつた音が鳴

三波 「あ、終わつた。」

三波、立ち上がり、大量の洗濯物をラ

ンドリーバッグに入れれる。」

吾妻、洗濯物を見ないよう三波に背

中を向ける。」

三波 「おじさん。行かなきやでしょ? もうい
きな。地獄が待つてるよ?」

吾妻 「うん:」

三波 「私はもうちよつと勉強してから帰るか

ら。」

と、元いた椅子に座る。

吾妻 「コーンポタージュ。」

三波 「ん?」

吾妻、三波の正面に座る。

吾妻「コーンポタージュ飲んだら行くよ。」

三波「いや、行きなよ。」

吾妻「君ももうここにいる意味はないじゃない。」

三波「私はないけど、おじさんはこの後、用事あるじやん。」

吾妻「今更、遅く行こうが早く行こうが変わらないよ。」

三波「それもそうか。」

数秒の沈黙。

三波「いや早く行つた方がいいよ。やっぱり行きなよ。」

吾妻「正気にならないでよ。そのまま騙され

ててよ……」

三波「てか、おじさんさつきコーンポタージュ飲み干してたじやん。ほら、もういる意

味ないよ。」

吾妻「スープはね。コーンがまだたくさんい

る。」

三波 「いいじやん。コーンは。もう取れないから行きなつて。」

吾妻 「食べ残しはダメだよ！生産者さんに顔向けできないじやない！」

三波 「（ため息）まあ、いたいならいいけどさ。これで怒られても知らないからね。」

吾妻 、缶に残ったコーンを取ろうとする。

三波 、自分のコーンポタージュを見つめる。

吾妻 「倫理ってさ、何を学ぶの？」

三波 「え？」

吾妻 「僕、倫理の授業取らなかつたから何を学ぶか知らないんだよね。」

三波 「知らないのにいつか役に立つとか言ってたの？」

吾妻 「うん。学校でやることだから何かしらには役立つだろうなあつて。」

三波 「おじさん、人生適当に生きてきたでしょ？」

吾妻「ばれた？」

三波「おじさんこそ倫理やるべきじゃない？」
生きるとは何かとか教えてくれるよ。」

吾妻「ああ、哲学みたいなこと。」

三波「そうそう。人間は死ぬために生きると
か書いてる。」

吾妻「……僕は僕が生きるために生きたい
どな。」

三波「みんなそうでしょ。」

吾妻「滑り止めの大学に行くのは君の生きた
い生き方なの？」

三波「自分が生きたいように生きたいってい
うのはきれいごとで、エゴで、ただのわが
ままなわけじやん。」

いよ。」

吾妻「……浪人とかは？」

三波「こんな夜にこの量の洗濯物を、コイン
ランドリーに回しに来る家庭だよ？浪人す
るお金なんかないよ。浪人することも現実
から逃げているだけだと思うし。」

吾妻「未來のためには進んでいるなら、それは
逃げじやなくてちょっとした寄り道なんじ
やない？：：こんなびしょ濡れ逃亡タキシ
ードが何言っているんだって話だけど。」

三波「たしかに、世界一説得力ないね。」

吾妻「まあ、君の人生だから、君が決めな。」

三波「うん。」

吾妻、スマホに電話の着信音が鳴る。

吾妻「あ、ごめん。また電話だ。」

三波「うん。」

吾妻、コインランドリーの外に出て、17

電話をする。

三波、倫理の教科書を手に取る。

三波「逃げてみるか：：」

と、忘れ物ボックスに倫理の教科書を
入れる。

吾妻、さらに肩を落とし、コインラン
ドリーに入る。

三波「（ニヤニヤと）もしかして第3フェー
ズ？」

吾妻 「正解。よくわかつたね。」

三波 「体から負のオーラがありえないくらい
出てるもん。」

吾妻 「そう？ そうだよね……」

三波 「何言われたの？」

吾妻 「30分以内に戻らないと……」

三波 「戻らないと？」

吾妻 「ああ！ 恐ろしすぎて口にできない。」

三波 「（笑って）逃げたらこうなるのか。」

吾妻 「さすがにもう行くわ。僕を反面教師にして頑張るんだよ。」

三波 、吾妻のコーンポタージュを手渡し、

三波 「ほら、これも食べきらないと生産者に怒られるよ。」

吾妻 「そうか……」

と、コーンを必死に取ろうとするが、苦戦する。

三波 「へたくそだなあ。」

吾妻 「（缶に口を付けたまま）うるさい。」

吾妻、やっと最後のコーンが取れる。

吾妻「取れた。」

三波、吾妻のジャケットを手に取る。

三波「うわ！まだびしょ濡れじやん。」

吾妻「ああ、ごめん。」

と、ジャケットを受け取る。

吾妻「じゃあ、現実に戻るよ。」

三波「うん。地獄をとことん楽しんで。」

吾妻「（苦笑いで）……うん。」

と、コインランドリーを出ようと扉に手をかけ、振り向き、

吾妻「さっき、嘘ついた。」

三波「え？」

吾妻「サイン、コサイン、タンジェント。」

三波「それが？」

吾妻「全部パソコンが計算してくれるから、

使つたことない。」

三波「（笑つて）大人つて嘘つきばっかり。」

吾妻「逃げずに正直に言つたことを誉めてほしいな。」

三波 「（うなずき）偉い。」

吾妻 「あともう一つ。」

三波 「なに？」

吾妻 「大人って結構、話聞いてくれるよ？」

三波 「うん。」

吾妻 「それだけ、じやあね。」

と、コインランドリーを出て、雨の中の住宅街を走る。

三波 「はあ：：」

三波、カバンの中から合格通知書を取り出し、びりびりに破き、ゴミ箱に捨て、コーンポタージュを飲み干し、三波「穏やかな方の地獄に行つてみるか……」

とランドリーバッグとカバンを背負い、コインランドリーから出る。

（完）